

---

# スペース

石橋 望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スペース

### 【Zコード】

Z6205A

### 【作者名】

石橋 望

### 【あらすじ】

僕が一体何をしたと?本当に勘弁してください。確かに僕は地球上一番足が速くて、一番力が強くて、スポーツ万能だけど……。そんな事は関係なく僕を巻き込まないでおくれよ。いやいや本当に僕は怪我人なんです。のんびりと暮らしながら、久しぶりの余暇トリハビリに専念したいだけなんです。準とウォールのトンデモコメディー!!

## プロローグ『激動の宇宙』

「クソツ！ もつと早く救援を呼んではいけば……」

一旦隕石群に身を隠したウォールは軽く舌打ちをしてから再び右腕に付けていたコネクタに向かって叫んだ。

「こちらはウォール、頼む応答してくれ！」

（ザー……ガガ……ピ）

空しい機械音が耳に付いているイヤホンから流れた。

「全く……、こんな貧乏クジなんか引きたくないなあつたよ！」

またもや軽く舌打ちしてからウォールは何かを覚悟したように隕石群から飛び出した。

特A級特殊防護スーツは太陽風でボロボロ、常用酸素供給マスクも、もう長くは持たないだろう。

決死の思いで飛び出したウォールを見計らつていたかのように巨大な棍棒のような物が横なぶりに襲い掛ってきた。

不意を突かれたウォールは巨大な棍棒のような物の直撃を喰らい、まるで美しい放物線を描いたホームランの様に吹っ飛んだ。

慣性の法則で飛び続けるウォールの眼前に何か人工物の破片が迫つて来た。恐らくスペースコロニーから剥がれ落ちた電力パネルの一部だろう。

ウォールはくるりと前転すると破片に着地して一気にジャンプして、なんとか体勢を安定される事に成功した。

そうしてからもう一度、神に祈るような思いでコネクタに向かって叫んだ。

「…………！」

そこで初めてコネクタが壊れている事に気付いた。恐らく先ほどの一撃で完全にやられてしまったのだろう。

レバー・マノイド型生命体は触覚などが付いていない為、声でしか「ハハニケーションをとる事が出来ない。

しかも宇宙と言つ空氣の無い環境では、声紋認識「ネクタがない」と声 자체が発せられないのである。

「…………！」

ウォールは三度、軽く舌打ちした。

それから程無くしてウォールの意識は完全に途絶えてしまった。

## プロローグ『激動の宇宙』（後書き）

この小説を読んでくださった方々、初めまして。  
最近、小説に興味を持ち始めて、趣味程度にと書いています石橋  
望です。

一応タイトルが『スペース』となつておりますが、決してSFではないので、ご注意ください。

本当はSFを書きたかったのですが、とても私にはそのような技量  
は無く、話を練っている途中から路線変更したのは言つまでもあり  
ません。

このプロローグだけSFになつてしましましたが…。

そういう経緯から、せめてタイトルだけはSFっぽくと思い、短  
絡的に『スペース』と付けてしました。

私は書くのが亀の歩みのように遅いので、無事に完結できるかどうか  
分かりませんが、長い目で見てやってください。

一言でも良いので、感想や評価を頂ければ幸いです。

## プロローグその一『激動の地球』

（……パンポーン……パンポーン）

（……パンポーン……パンポーン）

一定のリズムで呼び鈴が鳴つたと思うと、何の躊躇もなく玄関のドアが景気良く開いた。

家賃三万程度のアパートの玄関は、とても玄関と呼べるような場所ではなく、靴置き場と表現したほうがしつくりくる。

「足之本さん、お荷物ですよ！」

常識人からすると明らかに住居不法進入な宅配業者は、右胸にスペースシップのロゴがデザインされたバイロットスーツを身に付けており、おでこの辺りに亜光速宅急便とデジタル表示されているヘルメットらしきものを頭に被っていた。

足之本 準<sup>あしのもと じゅん</sup>は別段、驚いた様子も無く玄関へと軽く走つて業者を迎えた。

爽やかな黒い短髪、適度に焼けた小麦色の肌、そこだけ見ればいかにも健康そうだが、長身痩せ型な体格に加え、常に眠たそうな一重まぶた。

別に機嫌が悪い訳でもないのに、「もしかして機嫌が悪いの？」と人によく言われるような青年である。

「ロウさん、お元気でしたか？」

ロウと呼ばれたその宅配業者は軽く会釈をした。

「指紋の確認、お願いします」

勝手にドアを開けて玄関へ入つてきたロウは悪びれた様子も無く、霸氣のある声で準に指紋の確認を促した。

届いた荷物は紙パックでなければダンボールでもなく、小型冷蔵庫のような形をしている。

上辺には指紋認証パネルが付いており、準が右手の人差し指を軽く置くと「パンパカパーン！！」という大げさなファンファーレが鳴り、ほぼ同時にロウがいつの間にか取り出していたクラッカーを炸裂させた。

「おめでとうござります、あなたの指紋が見事に認証されました！」

「毎度の事ながら、それはどうも」

準が冷静に切り返すと、ロウは信じられないと言った表情で準の両肩を揺さぶり始めた。

「ちょっと、ちょっと……なんで落ち着き払ってるんですか！？」

「ひいいやあ、もお慣れええましいたいあ」

なんだかよく分からぬハンドパワーで、準はコンニャクのよう

に揺れている。

「私共、亜光速宅急便は単に荷物をお渡しするだけではなく、お客様との積極的なコミュニケーションをですね……」

「うそおれえはあ以前にいもおお聞いきいまああしたあい」

「だつたらもう少し盛り上がつてくださいよ…」

準はなんとかロウの手を振り解くと、「だから強要はやめて下さい」と肩で息をしながら言葉を捻り出した。

「あつ……申し訳ありませんでした」

準がこの辺境惑星に移住してきて以来、顔見知りと呼べる人物はロウぐらいしかいない。彼は亜光速宅急の辺境回り担当で、荷物を届けに来るのは大抵の場合は彼である。

多い時には月に四、五回は荷物を届けに来るのだが、ここ一ヶ月ぐらいは来てなかつたので準は話し相手が居らず、内心寂しかったのである。

「ところで、この星の重力にはもう慣れました？」

ロウが他愛も無い話を切り出す。

「さすがに慣れましたよ、最初は体が浮いていた感じでしたけど」

「私なんか結構頻繁に荷物を届けに来ますけど未だにどうも……」

「惑星間連合が定めている平均重力の七〇パーセントしかないですからね」

靴置き場でしばらく話してからロウは「また来ますね」と言つて、外に色彩粒子でカモフラージュして停めてあつたスペースシップに意気揚揚と乗り込んだ。

『たとえ体が碎け散るうとも亜光速で届けます、荷物とか信頼とか』この会社のセンスを疑いたくなるような標語らしきものが機体側面に書いてあるスペースシップは、空中で静止すると亜空間へと消え去つた。

「さてと……」

「散らかっているクラッカーでも片付けるか」

何故自分がクラッカーを片付けなければならないのかという訝然とした疑問があつたが、準はさつさと片付けると届いた荷物を部屋へと運んだ。

小型冷蔵庫のような形をした荷物の取つ手を持つてゆつくりと開く。すると中からいかにもらしくドライアイスのスモーク的なものがフワフワと漂いだした。

……といふか演出用のドライアイスである。

「……ロウさん、やり過ぎです」

クッション材と一緒に入つていたドライアイスを取り出すると出てきたのは、なんだか怪しい錠剤やら液体の入つたボトルやら。

それらを更に取り出すと、一番奥に一センチ四方のカードが入つており、表面には銀河標準文字で『愛のビデオレター』と書かれていた。

準が怪しい雰囲気が漂つ『愛のビデオレター』を自らの腕に装着されている再生機に差し込むと、顎ヒゲを蓄えた男性とツインテールの幼い女の子の二人が空中に映し出された。

「久しぶりだねウォール、お父さんだよ」

「ちょっとお父さん……お兄ちゃんは今、アシノモトジユンつて

名前なのはー！」

「ああそだつたね、アワノナカジョンか」

「違ひわみ、ア・シ・ノ・モ・ト・ジ・ユ・ンナ・」

「ああそりだつたね、アジノモトジャンか！」

111

夕しゆけたねアシノモト お父さんだよ

お尻をやんぐらしむ！」

「お前が重症を負つてからもう半年になるのか。どうだそつちの星は？辺境だが空気が澄んでいると病院の先生から聞いている。順調ならばお前の怪我も大分良くなつてきている筈だ」

(パンポンパンポン)

「あ、すまんがミロン出でくれないか？」

「ええ～！……私もお兄ちゃんに話したい事あるのに上

「今晚ナクドナルドのハンバーガー買つて来てやるから」

「私がドナルドよりマスハーフの方が食べたい！」

一分か二分か三分か四分か、買つて来てやるから

(ドタドタドタドタ)

「えへ、少し話が逸れてしまつたがお前の怪我が……」  
(お父ちゃん! 町会長のジンねがわんが二十一題の「アリ」壁敷問題  
で話があるからつて来てるよー! )

「ああ、幽さんは今日マークの講習会に行つてゐるから、また明日こでも来て下れ。ビジンせんこ出すといつてくれ～！」  
(はあ～い！)

ピッ！

準は何の躊躇も無く再生機の停止ボタンを押してカードを取り出

した。

これ以上『愛のビデオレター』を再生してしまうと、余計自分の怪我が悪化してしまいそうだった。

足之本 準……本名、ウナー・ウォールは第六十一太陽系に属するゾイと言つ惑星の出身のゾイ星人である。

ゾイは年間平均気温が二十三度、夏が長いがちゃんと四季が存在するリゾート惑星で、原住はヒューマノイドのゾイ星人である。

ゾイ星人は他の生命体に比べて肉体が極端に発達しており、ヒューマノイド型生命体の中ではトップクラスの筋力を誇る。

それ故に殆どの彼らは男女関係無く惑星間連合組織という軍隊にエリートとして入隊し、銀河の平和を脅かす野生宇宙怪獣や凶悪な種族と日々闘つているのである。

もちろん殉職者や怪我人が少ないとは言えず、今回の準のようこそ宇宙怪獣とのタイマンでギッタンギッタンに叩きのめされて重症を負うケースも日常茶飯事だった。

準は全身打撲、両肩亜脱臼、頸椎骨折に加え、腰から下はとても比喩出来ないようなぐちゃぐちゃの状態でアンドロメダ総合病院へと担ぎ込まれた。

一時は心配停止状態までいったが、医師たちの懸命な努力、死に物狂いのリハビリ、家族の励ましによつて何とか日常生活が苦にならない程までに回復したが、まだ職場には復帰できないと言う事で医者に紹介してもらった辺境未開惑星『地球』にリハビリと休暇を兼ねて移住してきたのである。

地球はゾイ星と気候風土が非常に似ているが、重力がゾイ星の半分程度で空気中の成分に含まれる酸素がゾイ星の二倍である為、怪我や病気の自然治癒に非常に適した脅威の惑星なのである。

ちなみに未開惑星である為に本来は移住できないのだが、地球原住の黄色人種、とりわけ『ニホンジン』という種族がゾイ星人の姿と酷似していた為、特別に上からの移住許可が下りたのである。

「えつと……、光子錠剤が三錠に、絶対零度飲料を軽量スプーン一

杯分と……」

準は届いた荷物の中に入っていた薬をブレンンドして一気に飲み干した。

「……辛いし痛い」

薬は苦いか甘いというのは地球人のいかにも未開惑星らしい偏見であつて、全宇宙的に見れば薬と言うのは辛いか痛いかなのである。しばしの悶絶の後に「よしつ……」と意気込むと準は着替えて靴を履いて勢い良く玄関を開けた。

「今日から中間テストだつ！」

準は地球人年齢だと十八歳であつた……。

## プロローグその一『激動の地球』（後書き）

この小説を読んでくださった方々、初めまして。  
最近、小説に興味を持ち始めて、趣味程度にと書いています石橋  
望です。

一応タイトルが『スペース』となつておりますが、決してSFではないのでご注意ください。

本当はSFを書きたかったのですが、とても私にはそのような技量  
は無く、話を練っている途中から路線変更したのは言つまでもあり  
ません。

そういう経緯から、せめてタイトルだけはSFっぽくと思い、短  
絡的に『スペース』と付けてしました。

さて『激動の宇宙』は、この『スペース』という作品全体のプロロ  
ーグという位置付けですが、今回の『激動の地球』は地球人、足之  
元 準としてのプロローグという位置付けで書きました。  
まだSFが名残惜しいのか、コメディとしては中途半端な感じだと  
自覚しております。

ともかく私は書くのが亀の歩みのように遅いので、無事に完結でき  
るかどうか分かりませんが、長い目で見てやってください。

一言でも良いので、感想や評価を頂ければ幸いです。

## 第一話『丸永商店街』

言ひ今まで無く中間テストは散々な結果であった。

勉強の内容が古過ぎて、先生が何を言ひているのか分からぬ事があるものの、化学や数学なんてどこの星も一緒である。

日本語は地球に来る前にちゃんと勉強していたので何となる。準にとつて問題は社会やら英語なのだ。

日本の社会、歴史も日本語と同時にある程度の勉強はしてきたはずだったが、『黄金の国ジパング』とか『鬼ヶ島』とか『スペースインベーダー』とか全く出てこなかつた。

英語も理解不能。日本語でさえやつと読み書き出来るレベルなのに、とてもではないが外の国の言葉など覚えられるはずなどない。

「なんで惑星全体で共通語じやないんだ……？」

まあそれも未開惑星では当たり前の事なのだらうと思ひながら準は丸永商店街を歩いていた。

この商店街はコロッケや搔き揚げなどの安くて美味しい惣菜屋が多く、夕方には金欠ハングリーな地元学生たちでとても賑やかになる。

準もそんな賑やかしの一人である。

いつものように五十円のポテトコロッケを口の中でホクホクさせていると、

「足之本 準！ 帰宅途中の買ひ食いは校則で禁止よー！」

後ろから急に呼ばれたのと、聞き覚えの無い声に呼び捨てにされた一段の驚きで準は体ごと振り返る。

一瞬、燃えるような夕日で視界が遮断されてしまったが、よく目を凝らすとそこには女性が仁王立ちしていた。

「あなた、足之本 準でしょ？」

腰まで伸びた長い黒髪、どこか猫を連想させるつり上がった目、すらりと伸びた華奢な腕と足。

女性はどこか人を馬鹿にしたような笑みを浮かべている。

「な……何？」

警戒しながら準はゆっくりと半歩下がる。

「そんなに引かないでよ、ホラ」

女性は当り触りの無い自分の胸を指差す。その胸の部分には私立鷹野日高校の校章がパツチしてあった。

「あなたと同じ高校」

「……だから何？」

そんなの見れば分かると言わんばかりに準は冷たく切り返す。

しかし女性も相変わらずの不適な笑みで続けた。

「名前は桜庭さくらば 鈴鹿すずか、風紀委員長よ」

「いやいや、風紀委員長様でしたか……買ひ食ひしてゴメンナサイ！」

準はマッハの速度で謝ると、マッハの速度できびすを返しクラウチングスタートから秒速六百メートルの速度を持つ脚力で逃げ出した。

「き……消えた……」

もちろん普通の地球人には秒速六百メートルの生物の姿など見えるはずも無く、鈴鹿はポカンと立ちすくむ。

しかし、しばらくしてまた不敵な笑みを浮かべて呟いた。

「足之本 準……噂通りね」

マッハで逃げ出した準はアフリカのナントカ族も真っ青の動体視力で人の波を見事に交わしながら……、

（……つて、ちょっと待てよ）

前方に人がいない事を確かめて準は両足を思い切り地面に着いて急ブレーキをかけた。靴とアスファルトが摩擦で擦れる音が周囲に響き渡り、煙を後方に撒き散らしながら準は止まる事に成功した。恐らく今ので靴底が一センチ近く擦り減つただろう。

足元から煙が出ている人間が唐突に出現したことに周りの学生や主婦らしき人達がざわつき始める。

（おい、あいついきなり現れては足元から煙を撒き散らす新手の変質者よ！）

（何あれ、煙みたいなのが……）

（不機嫌そうな顔してるな）

（きつとこきなり現れては足元から煙を撒き散らす新手の変質者よ！）

（警察に電話したほうが……）

（いや、あの煙を見ろよ）

（なるほど、消防か）

準は好き勝手に「ゴチャヤ、ゴチャヤ話」が盛り上がりしている周りの田を気にしながら呟いた。

「何で僕にだけ注意するんだ、アイツ？」

よくよく考えてみれば、鷹野田高校の生徒は周りに山ほどいる。みんな何か食べたり飲んだり、商店街のゲームセンターで遊んでいる生徒だって沢山いる。

「それに僕の名前も知っていたし、いきなり呼び捨てだし……」  
そんな事を悠長に考えていると、

（ウウ～ウウ～……、ピ～ポ～パ～ポ～）

誰かが本当に電話してしまったのか、もしくは近くの交番に駆け込んだのか、パトカーがやって来た。

「どこだ！ 体中のありとあらゆる穴から光化学スモッグを撒き散らしている不機嫌な透明人間は！」

パトカーから降りてきた警官はなんだかよく分からぬ事を叫びだした。

どうやら色々と脚色された拳句、誤情報が伝わったらしい。

準は嘆息して警官の前に歩み出て言った。

「それは多分僕の事です。たしかに機嫌は悪いかも知れませんが、光化学スモッグを撒き散らした覚えも無ければ透明人間でもありますせん」

「じゃあ何だ？」

「え～……それはですねえ……」

「よし、逮捕

警官はこじりとばかりに手錠を取り出す。

「何でいきなり逮捕なんですか！？」

准は目玉が飛び出んばかりの勢いで警官に向って寄つた。

「見るからに怪しいからだ」

「怪しくないでしょ別に。見てくださいよ、普通の高校生ですよ？」

「普通ならいきなり現れたり、煙を撒き散らしたりしないと思つが？」

たしかに警官が言つてゐる事は正論である……逮捕の件を除けば、この警官ならば補導ぐらゐは平氣でしそうな勢いだ。

准はしばらく黙り込んで考えた挙句、やつぱりクラウチングスタートの体勢に入つた。

「ちょっと待ちなさい

私立鷹野田高校の風紀委員長、桜庭鈴鹿が群集をかき分けて風の  
みうにサラッと現れた。

両手に一個ずつ五十円のポテト「ロロッケを従えて。

「そつちこそちよつと待て……」

准はワナワナと体中を奮い立たせて言つた。

「何だその両手のロロッケは！？」

「さつき買ったのよ

「そういう事じゃなくて、買つて食つは禁止だつてさつや……」

「確かに校則では第四章、登下校時における諸注意に引っかかるわ

ね」

「いやだから、あんた風紀委員長で、さつき僕にだけ注意して、買  
い食つは禁止だつて、みんなしてゐるのに……」

「そうね、ちよつと面白そうだから注意してみただけ

「…………」

准と鈴鹿との緊迫したやりとりに野次馬たちは息を飲む……が、

「とりあえず、どっちでもいいから逮捕をしてくれ。何だつたらジヤンケンで決めてもいいぞ」

何だか手柄の欲しそうな警官が話しに割り込んできた。

「うるさいわ！」

準と鈴鹿のダブルアップバーが警官の顎に炸裂した。

言葉では表現できないような快音を残して警官は五メートル近く舞い上がり、空中できりもみ回転してから地面に落ちてきた。

服はボロボロ、顔はグシャグシャ。とても可哀相な事になつている。

野次馬の誰かが救急車を呼んで、別の誰かが仰向けにのびている警官の両足を持つて引きずつていった。

「彼は職務を全うしたわ……、立派な殉職よ」

鈴鹿の一言に準も含めてその場にいる全員が「ウンウン」と頷いて手を合わせた。

## 第一話『丸永商店街』（後書き）

この小説を読んでくださった方々、初めまして。

最近、小説に興味を持ち始めて、趣味程度にと書いています石橋  
望です。

私は書くのが亀の歩みのよつに遅いので、無事に完結できるかどう  
か分かりませんが、長い目で見てやってください。

一言でも良いので、感想や評価を頂ければ幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6205a/>

---

スペース

2010年12月9日14時41分発行